

## 詩歌・小説の中のはきもの (第32回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

313 我が草庵の門前は鶯横丁といふて名前こそやさしいが、隋分嶮悪な小路で、冬から春にかけては泥濘高下駄を没するほどで、ために来訪の客はおろし立ての白足袋を汚してしまふたといふやうな事は珍しくないのである。

正岡子規

★『病牀六尺』から。下駄というのはもともとぬかるみ用の履物である。そんな常識が忘れられてしまった。齒の高いものを足駄と呼ぶようになったのはいつのころか詳らかにしないが、ぬかるみの足駄は履きにくかった。子規を訪ねる客人も「下駄をくねらしてころぶ」ことがあったという。靴を履くようになって、最大の特典は足首を捻挫しなくなったことであることをこの文章で思い出した。昔は足首に湿布をして包帯を巻いた人が多かった。

314 前を走っているタクシーの後部が迫ってきていた。とっさにブレーキを踏み込む、強く踏み込んだせいで、靴のヒールが折れてしまった。ああっ、もうっ！プレッシャーがかかるとすっかり落ち着きをうしなってしまうわたしは、七百ドルもする靴をまたしてもパーにしてしまった。今月に入ってヒールを折ったのは、これで三度目。

ローレン・ワイズバーガー

★『プラダを着た悪魔 (佐竹史子訳)』から。駅の階段でけつまずいたり、街頭の敷石に細いヒールを挟んだりしてヒールを折っている光景はたまに見かけるが、ドライブ中のヒール折損は見たことがない。あるホテ

ルの玄関で、女優やモデルが自ら運転してきた高級車のキーを係員に渡すとき、シナをつくっていきなり車内からハイヒールを履いた脚を外に突き出すのを見たことがある。堅実というか野暮ったくというか、運転席でスニーカーをハイヒールに履き換えているような人はいなかった。考えてみたら、運転（肉体的）と折損（経済的）という二重の危険を冒して、彼女たちは見栄を張っていたのである。

315 すこしずつ

まるで溶けるチョコレート

靴の踵

空の雲

寺の石段

すこしずつ

きみたちの予定は確実に狂った

岩田 宏

★『三月九日 日曜日』の一節。長くしまい込んでいた登山用のザックを背負って山に行き、下山にかかったとき、突然ザックが裂けてしまった。突然は迷惑至極。少しづつ痛み、磨り減って行くのは幸せなことだ。癌の宣告をされたとき、医師が「癌はいいですよ。予定が立てられるだけでも」と言った。寝ているうちに冷たくなっていたというのは、嬉しくない。痛い痒いのといって死にたいのだ。それだから、靴の踵は私の死生観に合致している愛すべきものなのである。

316 麗かな天気が幾日も続いて、雪がおのずと解けてくる。道は『雪解けみち』になって、朝のうちは氷っても午過ぎか

らは全くの泥道で、歩くのにまた難儀なのが幾日も幾日も続く。そういう時には草鞋は毎日一足ぐらいつつ切れた。八つか九つになった僕はこうして毎日学校へ通った。

それを通越すと、道の片隅の方などに乾いたところが見え初めてくる。それが日一日と大きくなり、向うの方に見えていた乾いたところと連続してしまう。そういう土の乾いたところを、子ども達は『草鞋道』と云って、そこを踏んで躍らがって喜んだ。

齋藤茂吉

★『念珠集』から。小学校まで10キロほどの道は、冬になると雪が腰まで埋まったという。草鞋が毎日1足切れたというのも身につまされる。親に負担をかけたくなくて、道が乾く季節になると裸足になった。当時「草鞋道」という言葉は知らなかったが、もしそんな言葉を知っていたとしたら、正月のように「もう幾つ寝ると」とその日が来るのかと待ったに違いない。言葉があって初めてその日を待つということを考えられるのである。

317 革の質を見分けるのも革職人の大切な仕事である。以前は革も天然のままだったが、最近は革製造の技術が進み、良いものと悪いものとの見分けがとても難しくなった。例えば、一枚の原皮から出来るスエードは昔は一枚だけだったのに、今は原皮を二つに剥がして、二枚のスエードが出来上がるという具合である。革の良し悪しを判断するには、見て、手で触れてみて経験がきめる、方法はこれしかない。

朽見行雄

★『フィレンツェの職人たち』から。修道院はもともと自給自足の生活をしてきたから、靴などの革製品も造っていた。サンタ・クロチェ教会にも〔革の学校〕があった。いまは教会から離れて私立の革細工技術者養成学校になっている。その学校のマエストロ＝先生であるキーティさんの革についての説明である。一人前の職人になるには

「パッショーネ、つまり熱心にやる必要なんだ、熱心に、熱心に、熱心に」とキーティさんは朽見に言ったという。しかり。一人前の職人は熱意の結晶！それだからこそ敬意を払われなければならない存在なのだ。

318 ブーツまだちらほら混じる梅見客  
古田ソウ  
ぬぐと直ぐ疲れがどっと出るブーツ  
梶原じゅん

★梅見まではブーツだが、観桜となるとブーツはいささか重い感じがする。先日、久しぶりに上野の山に夜桜を見に行ったら、青いシートの横にブーツが6本立っていた。その瞬間、昔の軍艦の煙突を思い出した。夜の冷えに備えたのだろうが脱いでしまったら、一層寒かろうと同情した。宴会は盛り上がっていた。

319 私は、つねに座席の上に膝立ちになって窓のほうを向き、一心に景色を眺めていた。すると、小さな泥靴が座席の上にかかって、隣の客に迷惑が及ぶ。だから、私が座席の上にちょこんと膝立ちになっているとき、祖父はいつも母から渡されたビニールの靴カバーをせっせと被せてくれた。

林 望

★『東京坊ちゃん』から。電車の中で、子供に靴カバーを付けさせている親を見ると尊敬してしまう。ゴルフのクラブや登山用ストックの先端に毛糸で編んだカバーをつけている人を見かけるが、手づくりの靴カバーというのは余り見かけない。一度手製と思われる靴カバーを履かせた父親を見たとき、感激したので話しかけたところ、「おばあちゃんが造ってくれたんですよ。何足も呉れるもんだから使わないと悪いもんですから」と負担になっているような口ぶりだった。

320 左手の体育館の前を過ぎて階段を降りる手前に、二、三人の靴磨きがいた。驚いたことに、それはみんな早稲田の学

生らしかった。  
〈若者よ、体をきたえておけ！ 学友諸君、靴を磨いて行け！〉  
などというビラを貼っているのもいた。  
五木寛之

★『青春の門 自立篇』から。主人公の信介が博多から上京し、早稲田大学に登校した最初の日の出来事である。「黒は10円、茶色は15円。」だった。昭和30年代までの東京にはどこの駅前にも靴磨きがいた。なめしのいい革が増え、いくら磨いても光らないという可愛げのない靴が減り、また靴クリームも改良されて、折角の艶が直ぐに消えてしまうなどということがなくなったことも手伝って、靴磨きを専門家にゆだねなくてもよくなり、街頭に靴磨きの姿を見なくなってしまった。因みにその時信介はバスケットシューズを履いていた。

321 足袋はきて葉山の磯を調べたるむかしおもへばなつかしくして  
昭和天皇

★『おほうなばら』から「埼玉県の旅行行田の足袋を思ふ」。先年、行田の古代蓮を観に行ったら、靴屋にまでこの御製が掲げられていたのが微笑ましかった。私の会社でも昭和天皇のアイデアをいただいて、先帝陛下が海浜調査のときお使いになるお召し靴をご調製していた。底に滑り止めの粗い繊維を縫い付けたエスパドリユのようなちょっと洒落たものだった。

322 その春、幸治は栃木市の県立中学校に入学した。

白線が眼にしみる学生帽と白いズックの肩かけ鞆は新しかったが、学生服は母が仕立直してくれた軍隊服で、すぐに欠けてしまう瀬戸物の学生ボタンがついていた。

幸治はゲートルをまき、貫一のおさがりの地下足袋をはいて家を出る。…新しい教科書がまだ出来ないの、肩かけ鞆には村の上級生からもらった中学一年の黒塗り教科書が入っていたが、授業はほとんどなく、グラウンドの草むしりなど

が多いので、草刈り鎌を毎日持ってゆくのだった。

佐江衆一

★『リングの唄、僕らの出発』から。草履や下駄が中心の生活だった1946年ころ地下足袋は貴重品だった。だからこうして記憶されているのだ。今着るものも、履くものも、被るものも有り余る中で生活している子供たちは、モノには淡白だし、まして「お下がり」とは無縁だ。50年後、彼らは小学生や中学生のときに履いた靴をどのように回想するのだろうか。

323 ある人が「やれやれ、足袋が切れてしまった。雪駄が悪いせいだ」というと、雪駄がたいへん腹を立てて、「わたしの科（とが）ではございませぬ。大体、足袋の生地が弱いのです」

いわれた足袋も顔色をねずみ色に変え、「いえいえ、それは雪駄のいいがかりというもの。雪駄は鉄（かね）のあるのを鼻緒にかけ、ちゃらりちゃらりと音をきかせて、このように切れました」

「うぬ、切付けられたいか」と雪駄がいきり立つと、

「こいつ刺通してやろう」と足袋が怒る。

主も大いに持てあまし、「これでは水掛け論というものだ。足のかかと呼び、第三者の立場から証言させ、嚴重に調査してみよう」

とかかと呼びつけ、取調べると、かかとか

「わたくしは外に出ておりましたので、いっこうに存じません」

（鯛の味噌津）

★『日本のユーモア 江戸小咄篇』から。「鼻緒にかけ」は「ハナにかけ」。「切付け」は「切付雪駄」（雪駄というのは雪の日に草履が湿るのを避けるため裏に革を張ったものであるが、切付は板裏の安物）、「刺通す」は、足袋は刺して縫う。オチは、足袋が破れてかかとは外に飛び出していたというもの。念のため「足袋」は「タビ」、昭和55年の朝日新聞社の入社試験に出題したところ「クツシタ」とふりがなをつけた人

が何人もいたと扇谷正造氏が書いている。そんなことセンから知っていた方、馬鹿にするなどいきりたち私を「刺通し」たりしないで下さい。

324 かつて旧制高校生であったころ、おれはボロボロの上着をひっかけ、ツツルテンのズボンをはき、ひやめし草履かときに裸足、そんな恰好で校内をひたひたと歩いたから、予想外の印象を他人に与えてしまったらしい。

北 杜夫

★『箆笥とミカン』から。身幅を飾らず、専ら精神の修養に励むのが戦前の高校生のタテマエであったから、彼は“きたない”故をもって尊敬されたり、また阿呆あつかいされたという。

325 シラノ <sup>しりょう</sup>死霊がやって来た。冷たい大理石の靴を穿かされた、のが、自分でもわかる一重い鉛の手袋も！

エドモンド・ロスタン

★『シラノ・ド・ベルジュラック（辰野隆・鈴木信太郎訳）』から。死に臨んで、剣をかざし、「これは、これは！ ハッ！ ハッ！ 妥協、偏見、卑怯の亡者共だな！」と幻影を斬りまくるシラノ。俺のすべてを奪う気だろうが、神の御許にシミ一つつけずに持って行く、それは「私の羽根飾だ」と大見得を切り、ロクサアヌに額に接吻されながらこと切れる。鈍い色の“鉛の靴”ではなくて、シラノに似合う冷徹な光沢をもつ“大理石の靴”を履かせたところがロスタンの非凡なところだ。

326 男なら、きっと彼のように生きたいと願うだろう。彼のようなライフスタイルを持ち、服を着こなしたいと思うだろう。お洒落に無頓着なようでいてそうではなく、きちんと基本のスタイルがある。着心地のよさそうな、何でもない装いがごく自然に決まっている。ワーク・ブーツと、黒のひも靴と、ローファーと裸足が、彼の生活の中にくっきりと存在している。

高田喜佐

★『素足が好き』の「ヘミングウェイの愛した靴」から。私の部下に、短い出張にも替え履きを持参する男がいた。つち踏まずの部分に刻印された金文字を消さないように水溜りを避け、階段の角に足を乗せないなど靴を可愛がっていた。その時は、彼が後に社長に昇進するとまでは予見できなかったけれども、大幹部として会社を背負う人物になるだろうと確信した。彼は、たんなる目前の「生活」ではなく、長い「人生」の中に、靴の存在位置を明確に設定していたのだと思う。

327 モン・スウリの宿の近くで靴修繕の店を見つけて、何気なしに脱いで親爺に渡したのであった。親爺はぱくぱくしたゴム底に手をかけると、あっと止める間もあらばこそ、ベリッと二つに引き剥がし、そばのゴミ箱の中にぽいと放り込んだ。そして肩をすくめ、両手を広げて、「これは、もう穿けない。修繕のしようがない」と言ったのである。

奥本大三郎

★『金子光晴の靴』から。アジア放浪で知られる詩人は、マレーで“見かけテカテカの安物”を買ったが半年でだめになり、パリのリュクサンブール公園で、針と糸を使い“元靴”と言いたくなるような甲革だけの代物に新しい底を縫い合わせようとしていたという。私が注目するのは金子が自分の手で直そうとしていたことである。昭和20年代までは、極貧者は自分で靴の修理をしようとするのが珍しくなかった。街頭の靴直しとか傘修理人の作業が日常的に行われていたから、「見よう見まね」が可能だったのである。